

フランス絹工業の国際競争力*

— 1860年アンケートの検討を中心に —

清水 克 洋**

(昭和61年4月30日受理)

The Global Competitive Power of the French Silk Industry

—An Inquiry into the 1860's Enquête made by the
French Government—

by Katsuhiko SHIMIZU

This paper is composed of: 1, the main factors of the global competitive power which the French silk industry possessed, 2, the system of production of the French silk industry which supported the above competitive power, 3, on the characteristics of the French capitalism derived from the inquiry.

本稿の構成は以下のとおり。1. フランス絹工業の国際競争力の主要因。2. それを支えたフランス絹工業の生産体制。3. 1860年アンケートの分析から導かれるフランス資本主義の特質について。

はじめに

「フランスは発明し、想像し創出する。外国はコピーし、模倣し、真似る¹⁾」。1860年アンケートの絹工業にかんする部分を最も特徴づけるのは、センス、デッサン、創造性などの点で、フランスがイギリスをはじめ諸外国に優位しているとの証人たちの揺ぎのない自信である。本稿の第一の課題は、アンケートに登場する絹工業資本家の証言を通じて、当時のフランス絹工業の国際競争力の内容を解明することにある。

ところで、われわれは、すでに資本による労働者に対する専制的指揮権の観点から、1860年アンケートについての一連の分析を行ってきた²⁾。その際、もちろん、アンケートの内容そのものに規定されてはあられ、指揮権の貫徹する工場体制の発展が主要な問題となり、羊毛工業の一部や、金属小物業などの奢侈品部門での国際競争力については、指摘しながらも十分な考

* 1985年8月24日 経済史研究会(京都大学経済学部)夏季研究大会にて報告

** 北見工業大学一般教育等

察を与えたとは言えない。指揮権概念としての資本の視角から、これがどのように意味づけられるのか。ここに本稿の第二の課題がある。

以上とかかわって、第三の課題は、1860年アンケートの全体的性格について、何らかの総括を行うことである。というのは、偶然にも絹工業が主要部門としては最後の分析対象となったこと、また、絹工業がフランス資本主義に占める位置から、ふさわしくもあり、必要な地点に到達しているからである。これは、さらに、絹工業を典型とする奢侈品産業の輸出力が、綿工業、製鉄業の劣位を補い、小土地所有と結びついて農工両局面において小経営が大きな比重を占め、全体として「停滞的」と特徴づけられてきた当該期フランス資本主義の特質に一步接近することになるであろう。

以上の課題を追及するうえでの留意点の一つ。すなわち、理論経済学によれば、資本の労働者に対する専制的指揮権の貫徹は、同時に労働者の深刻な能力喪失を意味していることである。生産過程の精神的な諸力が手の労働から分離し、労働に対する資本の権力に転化すること、その英仏両国における現れ、国際競争戦上での役割と、それらについてのフランス資本家の認識に注目したい³⁾。

注

- 1) Ministère de l'Agriculture, du Commerce et des Travaux publics. Conseil Supérieur du Commerce, de l'Agriculture et de l'Industrie. *Enquête. Traité de Commerce avec l'Angleterre. V. Industries textiles. Chanvre, jute et lin. Soie et soieries. Tissus de crin et caoutchouc. Vêtements confectionnés.* Paris, 1861. 以下 *Enquête 1860. Industrie de la soie* と略記。
- 2) 拙稿、貿易自由化前夜のフランス綿工業「経済論叢」第130巻 第1・2号 昭和57年7・8月、フランス金属工業と貿易自由化「北見工業大学研究報告」第17巻 第1号 昭和60年11月、英仏通商条約とフランス羊毛工業「経済論叢」第137巻 第6号 昭和61年6月、研究ノート 1860年アンケートの検討—麻工業「北見工業大学研究報告」第18巻 第1号 昭和61年、参照。
- 3) Cf. K. Marx, *Das Kapital*, Dietz Verlag, 1953. Bd. I., S. 446. (『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店, 1965年, ㉓ a 552 ページ参照)。さらにマルクスは、イギリスにおける18世紀末の興味深い論争を紹介する。すなわち、イギリス商品に一般的な信用と名声を与えるところの手工業者や、マニュファクチュア労働者の独創、エネルギー、熟練を評価し、同じ仕事のくり返しは、この創造力を鈍らせ、愚鈍にするとの見解と、イギリス人労働者に支配的な自由、独立の観念は、マニュファクチュアの労働者には不要であるとし、怠惰や気ままやロマンチックな自由の夢想を根絶せねばならないとの主張である。後に見るように、この二つの傾向は、フランス1860年アンケートにおいて、それぞれ、綿績業資本家、綿織物資本家に代表されてくり返されることになる。Cf. *op. cit.* Bd. I. SS. 290-292. (前掲書 ㉓ a 359-362 ページ参照)。

I

委員会自身の要約によれば、アンケートは、あらためてフランス絹工業の栄光と力を示した。その指標として挙げられるのは、絹織物生産が半世紀で6倍に増大したこと、絹製品の実に3/4が輸出され、第1表に見られる増加を実現し、フランスの全輸出の1/4を占めること、

第1表 a. フランス絹製品輸出の増大

年次	輸 出 額 (百万フラン)
1827	115
1856	460
1859	500

Enquête 1860. Rapports, op. cit., p. 132.

b. 主な輸出先別増加 (百万フラン)

輸 出 先	1847年	1859年
イギリス	34	163
アメリカ合衆国	48	138
ドイツ, ベルギー, ロシア	28	89
アメリカ諸国	11	40
イタリア	10	21
スペイン, ポルトガル	7	21

Enquête 1860. Rapports, op. cit., p. 132.

第2表 絹の輸出入 (単位 1,000トン)

年次	繭			絹糸			絹織物		
	生産	輸入	輸出	生産	輸入	輸出	生産	輸入	輸出
1825-34	7.3	—	—	0.8	0.9	—	1.1	—	0.9
35-44	13.3	—	—	1.4	1.3	0.1	1.8	—	1.1
45-54	18.6	0.2	—	2.1	2.5	0.2	3.1	—	1.9
55-64	11.9	0.2	0.1	1.5	4.1	0.9	3.5	0.1	3.1
65-74	11.8	1.9	0.3	2.1	5.0	1.8	3.9	0.2	3.5

服部春彦 19世紀フランス絹工業の発達と世界市場「中央」54巻, 第3号, 1971年8ページより。

全フランスで25万台の織機, 100万人の労働者を擁し, それはフランスを除く全ヨーロッパに匹敵すること, などである¹⁾。この点についての立ち入った検討の前に次のことが指摘されねばならない。すなわち, 輸出されたのはもっぱら絹織物であり, フランスは有力な養蚕国ではあったものの, この時期には, かなりの量の繭, 絹糸を輸入したことである²⁾。第2表がそれを示す。さらに, これとかかわって, 第3表から, アンケートに招集された証人の大部分が, リボン, チュール織を含む絹織物業者 fabricant であり, 養蚕業者, 製糸業者は全く呼ばれていないことがわかる。それだけではなく, 羊毛工業, 麻工業についてのアンケー

第3表 部門別証人数¹⁾

絹織物	27
チュール織	7
飾り紐	13
リボン	7 ²⁾
絹屑紡績	7
メリヤス編	3
染色	4
縫糸, 刺繍糸	5

1) 文書による証言の場合, 多数の署名のあるものも多く, 正確な数値は問題にせず。

2) 商人1人を含む。

Enquête 1860. Industrie de la soie., op. cit.

トでは、原料自由化がフランス国内の牧畜や、亜麻、大麻栽培に及ぼす影響が質問事項に見られるのに対して、絹工業では全く問題にすらされていない³⁾。養蚕業、製糸業の利害は、政府、アンケート委員会の視野に入っていなかった。むしろ、原料自由化の立場から積極的に切り捨てられていたと言える。したがって、絹工業にかんする60年アンケートでは、絹織物業者の利害が主要な関心事であった。ただし、例外的に、この間、機械制大工業が確立しつつあり、同時に中間製品として重要性を増していた絹屑糸紡績については、かなりの数の証人が呼ばれ、独自の質問項目が設定されて検討されており、織物業との重大な利害対立が明るみに出されることになる。

全体として奢侈品的性格の強い絹織物にあっても、とりわけフランスが国際競争力を誇ったのは、高級品、流行品であることはこれまでの諸研究によって指摘されてきた⁴⁾。1860年アンケートは、その内容をいま少し詳しく解明することを可能にする。というのは、外国に対するフランスのデッサン保護が、原料自由化と並んで絹織物業者たちの主な要求となっており、この点から、フランス絹工業の国際競争力について積極的発言がなされたからである。ここから、アンケートに見られる絹工業資本家の証言の具体的分析に入ろう。

まず、高級品、流行品と言われる場合、両者の性格は少しく異なる。前者の典型的なものは、「輝き、肌ざわり、ニュアンス」が求められる超高級タフタ織であり、パリ、ニューヨーク、ロンドンの選ばれた雇客にのみ販売される⁵⁾。すなわち、原料の厳選を基礎とした製品の「質」の問題であり、飾り紐や、チュール織の場合にも、フランス製品の競争力の一要因として、この質が重視される。外国人の証言もそれを確認する⁶⁾。羊毛工業におけるフランス特産の羊毛を使った高級ウーステッド品たるメリノ織と同様、フランスが良質の絹を産出したことと結びついた競争力である。

しかし、何と言っても証言の中で目立つのは、流行と結びつく、デッサン、センスの強調である。第4表は、正確な数値は別としても、フランスの輸出が、ここに基礎を置いていたこと、少なくとも、当時の絹工業資本家が、そのように認識していたことを示している。第一に注目されるのは、国際的な流行の中心地としてのパリの役割である。絹織物市場として、リヨンの重要性は否定しえないものの、例えば、パリの一織物業者は次のように言う。「全ての国々はパリに従属しており、新規性、センス、美しい仕上りによって評価される製品をそこで購入するのである」⁷⁾と。リヨンの工業家たちも、全絹製品の自由化要求で展望したのは、パリ、リヨン双方が世界の中心市場

第4表 フランス絹工業の国際競争力とその要因

部 門	輸出を行う証人数/総証人数	センス、デッサンを重視する証人数/総証人数
絹 織 物	21/27	13/27
飾 り 紐	10/10	7/10
チュール織	6/7	3/7
リ ボ ン	6/7	2/7
縫 糸	3/5	0/5
メリヤス編	2/3	0/3
絹屑紡績	0/7	0/7

Enquête 1860. Industrie de la soie., op. cit.

となることであった⁸⁾。リボン製造の中心地サンテチエンヌの証人は、パリ市場の解放こそがスイスに競争力を与えたとし、そこからスイスを排除することを要求する⁹⁾。パリは絹織物のデッサンの中心地でもあった。「パリとリオンは、三世紀にわたってヨーロッパにデッサンとモデルを提供してきた」¹⁰⁾。デッサンのフランスからの流出を嘆く次の証言も結果的には同じことを意味する。「パリには、あらゆる新規品を購入して諸外国に送る専門の商会がある」¹¹⁾。一層重要なことは、絹製品に限らず、より一般的な流行やセンスの中心地としてのパリの役割である。リボン製造業者、「パリ、それはわが国の全ての芸術家、地方のあらゆる能力と才能を持つ人々が集まる場所である。パリは、センス、エレガンス、美しくまねなインテリジェンスを備えており、世界の流行の中心地である」¹²⁾。イギリス人証人もセンスと流行の中心であるパリとの緊密な結びつきがフランス絹工業の優位の要因とした¹³⁾。

センス、デッサンそのものについて見よう。証言において、二つの言葉は一連のものとして使われることが多い。しかし、言葉の意味の相違とともに、その担い手の違う点が注目される。すなわち、センス *un gout* と言われる場合、織元 *fabricant* のそれが意味されていたのに、デッサン *un dessin* は、もっぱら専門のデッサン家 *dessinateur* と結びつけて考えられたことである。つまり、流行の行方を見定めながらデッサンを選択し、あるいは、新規品をデッサン家に注文する *fabricant* の能力、これこそ、一見つかまえておけないようなものでありながら、証人たちが揺ぎのない自信を持つフランス絹工業の国際競争力の最大の要因であり、他の国々には見出しえない、とされたものである¹⁴⁾。リオンの一織布業者が次のように言う時、それは明瞭である。「模倣は恐るべきではない。われわれの製品の場合6カ月後にはもう古くなっており、コピーしても遅すぎる」¹⁵⁾ と。あるいは、同じくリオンの証人、「外国人によるデッサンの模倣はわれわれを傷つける。……しかしながら、この模倣は、われわれのセンスと創意性の証明であり続けるであろう」¹⁶⁾。 *fabricant* 自身がデッサン家を兼る場合もあった¹⁷⁾ とはいえ、問題は、狭い意味でのデッサンの創出とは区別されるべきセンスであり、デッサンに方向づけを与え、選択する能力である。もちろん、多数の能力あるデッサン家の蓄積の重要性は言うまでもない。多くの証言が *fabricant* とデッサン家の能力を並べて評価する。例えば、「わが国の *fabricant* とデッサン家は、一シーズンの流行の変化に照応し、第一位を維持するために、どれほどの費用をかけ、創造的な仕事を行うか」¹⁸⁾ と。フランスのデッサン家が、直接、外国にその創意を提供することを嘆く証言も、これを裏づけるものである¹⁹⁾。

以上、フランス絹工業の国際競争力の主要因たるデッサン、センスについての当時の絹工業家たちの認識と、その意味は明らかである。ただし、「*fabricant* の経験」、「デッサン家の能力」とともに、「労働者の知力、エスプリ」が指摘されることを見落してはならない²⁰⁾。それはフランス絹製品の「仕上り」、「製造」の良さを保証するものと考えられた。すなわち、流行の変化に即応するセンス、デッサンを最終的に具体化する製造技術である。これは、生産体制そのものにかかわる問題であり、節をあらためて検討したい。

注

- 1) *Enquête 1860. Rapports des Commissaires délégués et Procès-verbaux des Deliberation du Conseil Superieur. Rapports sur l'industrie des soie et soieries.* Par M. Natalis Rondot. p. 132. 以下、*Enquête 1860. Rapports.* と略記。
- 2) フランス養蚕業については、松原建彦 フランス近代養蚕業の発展過程「福岡大学経済学論叢」第19巻 昭和49年、参照。
- 3) Cf. *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, pp. 437-444.
- 4) 松原建彦 フランス近代織物工業の発達過程「福岡大学経済学論叢」第17巻 第2号 昭和47年、服部春彦 19世紀フランス絹工業の発達と世界市場「史林」54巻 3号 1971年、参照。
- 5) Cf. *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, p. 596. さらに以下の証言参照。パリ飾り紐製造業者、「外国の fabricant は、我々よりも質の低い原料を使うので価格の比較はできない」。Ibid., p. 538. 「我々のチュールはデッサン、製造、原料の点でイギリスよりすぐれる」。Ibid., p. 628. パリの fabricant は、「使用原料糸が極端に細いので、外国にも、国内にも競争者はいない」と言う。Ibid., p. 765. さらに、Cf. Ibid., pp. 539, 652, 702.
- 6) Cf. Ibid., pp. 657, 789.
- 7) Ibid., p. 782.
- 8) Cf. Ibid., p. 682. 他に次の証言も。パリの商人、「パリの商業は、世界の購買者に対し、フランス、および外国のリボンを提供することに大きな利益を見出している」。Ibid., p. 692. 絹織物の場合リヨンが生産の中心地でもあり、同時に市場の役割も大きかった。サンテチェンスを中心とするリボン織の場合、市場はもっぱらパリであった。
- 9) Cf. Ibid., p. 713.
- 10) *Enquête 1860. Rapports, op. cit.*, p. 170.
- 11) *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, pp. 758-759.
- 12) Ibid., p. 713. 「パール（スイス）はパリで見本を買って模倣し、我々が市場に供給するよりも早く製品をもたらすのである」。Ibid., p. 750.
- 13) Cf. Ibid., pp. 672-673.
- 14) Cf. Ibid., pp. 546, 583, 696, 706, 707, 727, 730, 778.
- 15) Ibid., p. 600.
- 16) Ibid., p. 585.
- 17) Cf. Ibid., p. 771.
- 18) Ibid., p. 730.
- 19) Cf. Ibid., p. 584.
- 20) Cf. Ibid., p. 706.

II

アンケートの証言から、当時のフランス絹工業の生産体制を要約すると第5表のようになり、部門ごと、地域ごとに極めて多様な形態が見られる。まず、絹屑糸紡績業では本格的に工場体制が確立していた。全22企業についての第6表は、生産手段、労働者の集中の進展を示している。この部門の証人は、現状を次のように認識していた。すなわち、一方でイギリスが、①機械価格、②資本利子、③石炭価格、④労働者の熟練、⑤国際商業網によって、フランスに対して優位にあること、他方で、スイスが、①イギリスからの機械の無関税輸入、②低賃金

第5表 フランス絹工業における生産体制

部 門	(地 域)	生 産 体 制
絹 織 物	リ ョ ン	主に chef d'atelier 制, 他に集中作業場, 問屋制マニユも
	ツ ー ル	集中作業場と問屋制マニユ
	アミアン	集中作業場と問屋制マニユ (織機は資本家の所有)
	ニ ー ム	主に問屋制マニユ, 一部集中作業場
	バ リ	問屋制マニユ (織機は労働者の所有)
飾 り 紐		集中作業場と問屋制家内工業
チュール		集中作業場と chef d'atelier 制
リボン		集中作業場と chef d'atelier 制
縫糸		工場制
メリヤス織		問屋制家内工業
絹屑糸紡績		工場制

Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.

第6表 絹屑糸紡績業における生産の集中

a) 紡 錘 数

	1,000 錘未満	2,000 錘未満	5,000 錘未満	5,000 錘以上
企 業 数	5	3	7	7

b) 労働者数

	50 人未満	100 人未満	300 人未満	300 人以上
企 業 数	5	7	5	4

1) 燃糸用紡錘を含む

Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit., p. 483.

労働力, ③豊富な水力の点で有利なことである¹⁾。若干のニュアンスの相違はあるものの, 綿工業の場合と基本的には同じ認識であり, したがって, 打ち出されてくる政策も同一の傾向を示す。保護関税と結合した機械制大工業化の一層の促進がそれである²⁾。チュール織の一部でも機械化の進展とイギリスに対する立ち遅れという認識があった。例えば, 「並チュール品についてはイギリスと同じ機械が自由に入手できれば対等な競争も可能になるだろう」と³⁾。そして根本的な生産構造改革が政策となる。なお手織が支配していたメリヤス編業者もイギリスに追いつこうとする政策を持つ⁴⁾。「われわれの生産組織の完全な更新, 根底的な再組織こそ, 同じ力でイギリスと闘うことを可能にし, さらに優位を得さしめるものである。そのためには機械輸入関税の廃止が必要である」⁵⁾。

センスやデッサンによって国際競争力を誇る織物業について検討しよう。第7表が, その一端を示すとおり, 織物業においても機械化はかなり進んでいた⁶⁾。しかし, 典型的な生産体制は chef d'atelier 制であった。その基本的条件は手織の機械織に対する優位である。技術的に

第7表 リヨンにおける絹織物業の生産体制

事 例	
1	chef d'atelier 制 1,200 台 (リヨン市内, 流行物 700 台, 農村, 色物, 黒 500 台)
2	chef d'atelier 制 1,000 台
3	機械制織布 400 台
4	機械制織布 500 台 手織 2,000 台 (分散)
5	chef d'atelier 制
6	chef d'atelier 制 150-200 台

Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.

機械化が不可能であり、製品の質を維持しえないとの証言が数多く見られる。「手織機の代りに機械制織機を使っても節約はなく、機械織は完成度で劣り質の低いものしか作れない⁷⁾。と同時に、機械制生産が特定のデッサンの大量生産にしか適さず、流行の変動に即応する絶えざるデッサンの創出、変更にはふさわしくないとの証言がより注目される。サンテチエンスの証人、「工場制生産のためには持続的需要が必要であり、流行品たるリボン生産には合わない⁸⁾。あるいは、機械化を検討したが、原料や製品の多様性、流行の変化に適さず、不採用となったとの織布業者の証言など⁹⁾。

この手織を基礎に典型的な問屋制マニュファクチュア、つまり問屋制家内工業も広く存在したことは、第5表に見られるとおりである¹⁰⁾。しかしながら、その一変種とも言うべき chef d'atelier 制こそ、フランス絹工業に特有な、そして、二大中心地リヨンとサンテチエンスに支配的な生産体制であった¹¹⁾。典型的な問屋制の場合、織元 fabricant は直接家内織布工を支配したのに対し、この体制では、fabricant と契約するのは chef d'atelier と呼ばれる人々であった。chef は2~8台、多くは2~4台の織機を所有し、自分自身もそれを使って働く織布工である。と同時に、しばしば compagnon と呼ばれる織布工を雇った。その場合、fabricant との契約単価の約 1/2 を賃金として支払い、残り 1/2 から諸費用を回収するとともに利益を得た。したがって、chef は問屋制家内工業下での織布工ではなかった。さらに、「ある fabricant が注文しなければ、彼 (chef) は別のところへ行く。時には一人の chef d'atelier のところに3~4人の fabricant から仕事が行くこともある」と言われるように、決して独立の商品生産者ではなく、fabricant との請負契約によって仕事をするにもかかわらず、大変強い自立性を特徴としていた¹²⁾。彼らが chef と呼ばれたこと自体が、この自立性を端的に示すものである。またこの生産体制が、la fabrique libre と表現されることもあり、ここにもその性格の一端が表わされている。

この chef d'atelier 制、fabricant-chef-compagnon の関係についての評価を、サンテチエンスの証人に聞いて見よう。そこでのリボン工業は第1図に見られる構造を持っていた。まず、300人の fabricant について、努力で成り上がった人々であり、絶えず chef d'atelier から補充さ

第1図 サンテチェヌヌのリボン製造業

fabricant	300人	
chef d'atelier	10,000人	織機 20,000台
compagnon	10,000人	

(他の関連労働者 30,000 ~ 40,000人)

Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit., pp. 707-709.

れることが指摘される。新製品の開発、流行の予測に全精力を傾けることについては、すでに検討したとおりである。次いで chef は、「織機の所有者であり、独立、自由に働き、機械を大切にする」だけでなく、「日々生産方法に無数の改良を加え、……フランスの織物の優位の源泉である」と絶賛される。第3に、大部分が若く、まだ結婚していない労働者たちは、「自分自身の織機を所有しようとする称賛すべき野心」があり、chef もなしえない想像を越える機械操作を行うと言われる¹³⁾。

一般的に、流行の変動に即応しやすいこと、生産手段所有によるエネルギー発揮、家族の中での生産がもたらす安定した勤労モラルなどを、問屋制家内工業の利点、工場制生産への競争力として指摘しうる。アンケートにもその主旨の証言がある¹⁴⁾。しかし、chef d'atelier 制に見られるのは、それを少し越えた事態、あるいは、問屋制の利点を極端にまで押し進めた事態である。われわれは、すでに、フランス絹工業の国際競争力が、製品の質を前提に、センスやデッサンにあり、fabricant、デッサン家に担われていることを見た。ここでは、それが chef d'atelier 制という特有な生産体制の下での、chef や労働者にも及ぶインテリジェンス、エネルギーの動員によって可能となっていることが明らかとなる。また、それとかわかって、彼らが fabricant の人材供給源になっていたことの意味も明瞭である。

労働者の質について、「われわれの製品は一般に作業場 atelier で働くことを好まない労働者によって作られる」¹⁵⁾、「ドイツ、イギリスの労働者は機械であり、わが国の労働者は職人 artisan である」¹⁶⁾との証言が見られる。サンテチェヌヌのリボン製造工については、「考える原動力ではなく」、「大工場の一歯車ではなく」、「一人前の人間、市民である」と言われ、「これらの労働者は全て自分の家で働き、兵営内に閉じ込められていない」と結論される¹⁷⁾。綿工業など工場制生産においてはフランス労働者の弱点と見なされていることが、ここでは積極的に、肯定的に評価されていることを確認しておこう。

このような現状認識から打ち出される政策は、一部には、スイスのデッサン盗用を理由に保護貿易要求を含みながらも、基本的には自由貿易政策であったことは周知のとおりである。ただし、見落してならないのは、それが chef d'atelier 制を典型とするフランス絹工業の現状維持と結びつけられていたことである。サンテチェヌヌの一証人は、「大工場に行くべきか、つまり水力や蒸気力によって動かされる機械を採用すべきか」と自問し、しかし、そうした場合、

豊富な資本と安価な労働力を持つスイスに対抗しえないと判断し、「われわれの生産は、エレガンス、センス、芸術性、流行の気まぐれへの適応によって維持されている。これは国民精神に依存するものではあっても、工場の仕事には適さない」と結論を下す¹⁸⁾。すでに技術的理由、流行の変動への即応の点で機械化に消極的な証言については見た。もちろん、原料絹の高価から消費が機械化の容易な単純、軽量品や、交織品に向っていたこともあり¹⁹⁾、「われわれが外国の安価品と斗うのに、新規さを手段とすることを続けるのなら、近い将来、外国市場から追い出されてしまう²⁰⁾」との危惧も表明されていた。また絹織物業においても機械化が重要な一傾向となっていたことは否定しえない。にもかかわらず、旧来の生産体制の維持こそ、センス、デッサンによる競争力を誇るフランス絹工業の1860年時点での基本政策であったと言えよう。

最後に、自由貿易の条件として、イギリスに対抗しうる原料調達のための国際商業信用網の確立、デッサン保護のための国際条約の締結が要求されたことを指摘しておこう。それが持つ意味は、これまでの検討からも明瞭であろう。

注

- 1) Cf. *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, pp. 479-483.
- 2) 機械関税引下げ要求など。Cf. *Ibid.*, p. 564.
- 3) *Ibid.*, p. 461. Cf. *Ibid.*, p. 570.
- 4) 機械化は不可能とする証人もいるが、現状の認識は同じ。Cf. *Ibid.*, p. 501.
- 5) *Ibid.*, p. 508.
- 6) とくに、400台の機械制織機を集中し、しかもデッサンでの優位を強調する証人は注目される。Cf. *Ibid.*, pp. 599-600.
- 7) *Ibid.*, p. 620.
- 8) *Ibid.*, p. 717.
- 9) Cf., *Ibid.*, p. 762. さらに、「機械化の試みは何度もくり返されてはいるが、製品の多様性で未だ成功せず」。Cf. *Ibid.*, p. 781. 他に、Cf. *Ibid.*, pp. 732, 735, 760, 766.
- 10) ツールの織布業者、「我々の場合、リヨンとは異なり fabricant と労働者の中間に入るのは何もない」。Cf. *Ibid.*, p. 617. 機械制織布と問屋制家内工業を結合する例も多い。Cf. *Ibid.*, pp. 621, 600, 598. またチュール織の場合、蒸気力使用にもかかわらず小作業場制の例も。Cf. *Ibid.*, p. 626.
- 11) 絹工業の生産構造一般、とくに chef d'atelier 制については、Cf. L. Villermé, *Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine et de soie*, 2 vol., 1840. 松原建彦 フランス近代絹織物業の発達過程、前掲論文、大野彰 フランス絹織物業とリヨン商工会議所の諸活動、「関西学院経済学研究」13 (1980年)、参照。ただ、chef d'atelier という言葉は、全くの普通名詞であり、fabricant が chef d'atelier になる、つまり、直接生産を営むようになる、というような使い方もされる。本稿では、以下に詳述する生産のあり方を、とくに chef d'atelier 制と呼ぶ。
- 12) Cf. *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, pp. 529, 602. あるリヨンの証人は、旧来の職人の流動、徒弟の消滅から chef d'atelier 制が生まれたとする。Cf. *Ibid.*, p. 592.
- 13) Cf. *Ibid.*, pp. 707-709.
- 14) たとえば、「私は織布が労働者に与えた財産をそんなに簡単に手放すとは考えられない。彼らの生産物を大変安価に供給して、マニュファクチュールとの闘争を続けている」。Cf. *Ibid.*, p. 593.

- 15) *Ibid.*, p. 701.
 16) *Ibid.*, p. 540. さらに、「これらの織機は労働者の所有であり、彼らの独立と個性を守るもの」との証言。(この場合、「労働者」は *chef* を意味する)。*Ibid.*, p. 592.
 17) Cf. *Ibid.*, p. 707.
 18) Cf. *Ibid.*, p. 709. リボン製造においても機械化の例はあった。ただし別な地方であり、高価な新規品は作らず。Cf. *Ibid.*, p. 688.
 19) Cf. *Enquête 1860. Rapports, op. cit.*, p. 133.
 20) Cf. *Enquête 1860. Industrie de la soie, op. cit.*, pp. 787-788.

III

綿紡績業、「フランス人労働者は、奢侈品工業に不可欠なインテリジェンスや抜け目のなさでは劣っていない。しかし、それは紡績工場ではあまり必要ではなく、むしろ、熱心に、注意深く機械を監視することや、肉体的な力が不可欠である」¹⁾。金属工業、「フランスでは、イギリスに見られるような機械的素質を持つ労働者を獲得しえない。……彼らは職人的であり、純粋に機械的な仕事を好まない」。羊毛工業、「イギリス人は子供のときから作業場に入り、仕事を変えずに熟練するのに対し、フランス人は作業場体制を好まず、自分の家で仕事をしたり、特定の仕事に専念しようとしなない」²⁾。麻工業、「わが国の産業の劣位は周知のとうり、労働者にインテリジェンスや大胆さが欠けていることではなく、彼らの独立心、呑気、軽卒から生ずる」⁴⁾。われわれは、これまでの1860年アンケート分析において、機械制大工業にもとづく工場体制に照応した資質を身につけていないことがフランス人労働者の弱点であると、証人たちが異口同音にくり返すのを見てきた。そこにこそイギリスに対するフランス資本主義の劣位が集中的に表現されているとし、フランス資本主義の進む方向は、工場体制の一層の強化と、それに照応する労働者育成にある、というのが証言の、そしてアンケート全体の一つの重要な特徴であった。ところで、絹工業にかんするアンケートの検討は、フランス人労働者に対する同じ認識が、逆にフランス絹工業の国際競争力の一要因として認識されていることを明らかにした。これは、われわれの基本視角、労働者に対する専制的指揮権としての資本概念からするなら、一体何を意味するであろうか。

まず第一に、*chef d'atelier* 制について。証人たる *fabricant* たちによって、それが *chef* や労働者の独立、個性を維持するものであることが、いかに強調されようとも、流行の変動に即応しうる *fabricant* 自身の自由を確保するための体制であったことは、これまでの検討からも明らかであり、次の証言によれば彼ら自身がそれを認めている。すなわち「労働者にとって製品を変えることが困難であっても、*fabrique libre* の場合、われわれは、種々の製造に応じて雇用数を制限すればよい」⁵⁾ と。*fabricant* と *chef* の関係が固定的でないこの生産形態は、一般的な問屋制家内工業よりも、*fabricant* が手を縛られない形で指揮権を及ぼしうる体制であったと言える。ただし、それは *chef d'atelier* 制における資本の指揮権の限界をも意味していた。サンテチエンスの一証人は、スイスでは *fabricant* は労働者の主人である、としたうえで、「そ

ここでは賃金は一定であり、失敗の恐れなしに厳しい仕事につかせることが可能である。フランスでは、反対に、労働者に支払われる加工賃は、注文の量に応じて変動せざるをえない⁶⁾と言う。あるいはピカルディで問屋制家内工業を組織するパリの fabricant も、当然その利点を認めながらも、工場体制への移行を困難ならしめる原因が、製品の多様性だけではなく、労働者の質にあるとする。「ピカルディの労働者は作業場で働くことを好まない。作業場では規則に従わねばならず、それは彼らの習慣ではない⁷⁾と。したがって、chef d'atelier 制、一般に問屋制家内工業がいかにかに流行の変動に即応しうる生産体制であるとしても、資本の労働者に対する専制的指揮権の観点からするならば過渡的なものであり、それが事実上は、当時の工業家たち自身によっても認識されていたことが明らかである⁸⁾。

第2の問題は、フランス資本主義の全体的な性格にかかわる。第8表に見られるとおり、1860年当時のフランスの主要な輸出品は、絹織物を中心に、センス、デッサンが重要な役割を果たす製品であったことが明らかにされている。われわれも、これまでの1860年アンケートの分析において、綿工業、金属工業、羊毛工業にも、そのような分野があることを見てきた。例え

第8表 フランスの主な輸出品

工業製品	1860—1856	1861—1865
	%	%
工業製品	1,155.2 (56.7)	1,312.0 (51.2)
織維製品	272.6 (35.7)	781.6 (30.5)
{ 綿糸・毛糸	8.4 (0.4)	16.8 (0.7)
{ 綿織物	69.0 (3.4)	79.0 (3.1)
{ 毛織物	185 (9.1)	272.4 (10.6)
{ 麻織物	16.0 (0.8)	19.7 (0.8)
{ 絹織物	444.5 (21.8)	380.8 (14.8)
既製衣料品	82.3 (4.0)	97.9 (3.8)
皮革製品	74.5 (3.7)	76.2 (3.0)
紙と紙製品	34.2 (1.7)	35.5 (1.4)
小間物	97.6 (4.8)	158.6 (6.2)
金銀細工品・宝石	16.2 (0.8)	18.6 (0.7)
流行品・造花	11.0 (0.5)	13.6 (0.5)
陶器ガラス	31.2 (1.5)	29.2 (1.1)
金属製品	44.5 (2.2)	41.7 (1.6)
機械類	6.1 (0.3)	8.2 (0.3)
化学製品	30.0 (1.5)	50.9 (2.0)
食料	946.6 (24.4)	587.0 (22.9)
ぶどう酒	200.8 (9.9)	226.1 (8.8)
工業原料	134.3 (6.6)	299.8 (11.7)
輸出総額	2,037.9 (100)	2,564.8 (100)

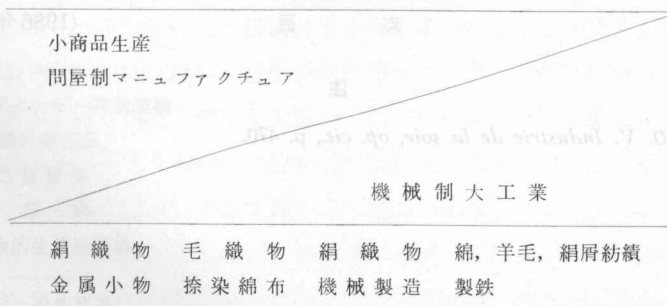
服部春彦 「フランス第2帝政下の貿易自由化と経済発展」『名古屋大学文学部研究論集 史学』20, (1973) 50 ページより。

ば金属小物では、「デッサン力でイギリスを恐れず」、「芸術性のあるものについては全世界へ輸出する」⁹⁾などの証言や、フランス品がモデルとして輸出され、イギリスがそれをコピーして大量生産する、との指摘がある¹⁰⁾。羊毛工業については、高中級品、センス品、新柄物での名声が確認され、柄物ラジャの場合、流行品輸出と、それを支える請負生産を検出した¹¹⁾。綿工業でさえも、一捺染業者は、「価格が5~10% 高いだけなら、センスとデッサンで競争が可能」と言う¹²⁾。同時に、絹工業においても、機械化の進んでいる分野も存在する。

したがって、当時のフランス資本主義の構造を極めて単純化して図示すれば、第2図のようになる。1860年アンケートの分析から明らかになるのは、フランスの誇る国際競争力は、主に小商品生産や、問屋制マニュファクチュアが支配する分野であり、その場合、安価な労働力が主要因になる場合もある¹³⁾ とも言え、センスや、デッサンがフランスの国際競争力の最大の要因となり、それを支える特有な生産体制が生み出されていたことである。機械制大工業を、いち早く実現することによって世界市場を支配するイギリス、さらに、安価な労働力を生かしながら、徹底したイギリス化を押し進めようとするドイツやスイスに対して、フランスは、機械制大工業化=イギリス化を必然的なものとして受け入れながらも、なお、小生産の支配する分野で特有な競争力を発揮しており、この、いわばフランス的な生産のあり方を維持しようとする、これこそ、1860年アンケートにおいて、フランス工業資本家が表明したフランス資本主義の国際的位置についての認識であり、そこには、イギリスに対する後発資本主義国としての、しかしフランスに特有な構造と発展方向が反映していると言える。

この節の冒頭に引用した、フランスとイギリスの労働者についての、フランス工業資本家たちの証言は、以下の認識として整理しうる。すなわち、フランスでは、機械制大工業が発展していない分野において、労働者のインテリジェンス、個性、大胆さが見られ、それがフランス工業の国際競争力を支えていること、他方では、工場体制の確立、強化にとっては、これらの労働者の能力は不要であるばかりか、かえって阻害要因であること。もちろん、フランス絹工業の国際競争力は、直接には fabricant やデッサン家によって担われ、その背後には、国際的流行の中心地パリという特殊な条件があった。また、この労働者の能力は chef d'atelier 制という特有な生産体制によって強められていたことも事実である。にもかかわらず、フランス人

第2図



労働働者の独立自由なあり方を肯定的に評価する工業資本家たちは、イギリスにおける巨大な生産力発展が、同時に、労働者の深刻な能力喪失をもたらしていたことを見ていたと言えないであろうか。イギリス化の道を進まざるをえないとしながらも、フランス的な特殊な発展方向を探ろうとするかに見える多数の証言が、それを支持している¹⁴⁾。

注

- 1) *Enquête 1860. IV. Industrie du coton*, p. 176.
- 2) *Enquête 1860. I, II. Industrie métallurgique. t. I*, pp. 387, 389, 386.
- 3) *Enquête 1860. III. Laine* p. 415.
- 4) *Enquête 1860. V. Industrie du lin et du chanvre*, p. 91.
- 5) *Enquête 1860. V. Industrie de la soie, op. cit.* p. 718.
- 6) *Ibid.*, p. 726.
- 7) *Ibid.*, p. 764.
- 8) 技術的にも機械化の可能な分野では当然その認識は強くなる。例えば、あるリヨンのチュール織業者は、*chef d'atelier* 制を「不確かな心もとない組織」と言い、イギリスの機械化されたそれと対比する。Cf. *Ibid.*, p. 639.
- 9) *Enquête 1860. II. op. cit.*, p. 291.
- 10) Cf. *Ibid.*, p. 135.
- 11) 拙稿、前掲論文参照。
- 12) *Enquête 1860. IV. op. cit.*, p. 123. さらに Cf. *Ibid.*, pp. 456, 558, 462.
- 13) 例えば、メリヤス織、刺繍品における農家婦人の家計補充的副業を基礎とする輸出。Cf. *Enquête 1860. V. Industrie de la soie, op. cit.* pp. 509, 626.
- 14) この点で、喜安朗 フランスにおける資本と労働の「初期的」対抗と6月事件「歴史学研究」, 第237号, 1960, 1, 参照。

お わ り に

「外国の染色はリヨンのそれより少し遅れる。しかし、われわれが数年でも停滞すればたちまち追い越されてしまうであろう¹⁾」とのリヨン染色業者の証言に見られるとおり、国際競争力とその要因は決して固定したものではなく、極めて動揺の激しいものである。1860年英仏通商条約時点における両国の競争力をより詳細に解明するとともに、その変遷をたどることは、われわれの今後の重要なテーマの一つとなるであろう。

(1986年4月30日)

注

- 1) *Enquête 1860. V. Industrie de la soie, op. cit.*, p. 470.